



母校

元小

学 校 だ よ り
令 和 3 年 5 月
川口市立元郷小学校
児童数：528名

児童の「自尊感情」を高める教育の推進

校長

さわやかな初夏の風に包まれて芽吹く若葉は活力に満ち溢れ、まるですくすくと成長する児童の姿そのものです。5月「皐月」。木々の緑は目に眩しく、新緑が香り立つ好季節を迎えました。

前年度より、本校は目指す学校像として、「児童の自尊感情を高める学校(夢をはぐくみ、児童のよさや可能性を引き出し伸ばす元郷小)」を掲げております。「自分を価値ある人間として尊重する感情」と定義される自尊感情ですが、独立行政法人国立青少年教育振興機構「高校生の生活と意識に関する調査」から文部科学省が作成した資料によると、多少の回復傾向はあるものの、「自分は駄目な人間だと思うことがある」という設問に「よくあてはまる」と回答した高校生の割合は諸外国と比べ高い状況となっているなど、日本の児童生徒の自尊感情の低下には歯止めがきかないのが現状です。

自尊感情や自己肯定感は、一般的に言う「自信」に近い意味の言葉です。また、心理学における「自尊心」、「自己効力感」、「自己有能感」、「自己受容感」と似ている部分もありますが、基本的には異なる概念であると言われています。

自分の意志に基づく行動について考えると、その行動に対する見通しがもてるほど、人はその行動を為し遂げようと努力する傾向にあると考えます。「行動に対する見通し」とはすなわち「為し遂げる自信」であり、自信をもつことでその行動を為し遂げる可能性が高くなると言うことができます。夢や目標を達成するためには、実現の可能性を自分自身で認知することが重要です。

こう考えると、「自分にはできそうだ」と思えば努力を続けることは容易なこととなり、反対に過去の失敗や苦い経験により「自分には達成できる能力がない」「行動しても失敗しそうだ」と思えば必然的に達成のための行動は起こしにくくなります。そうしてしまうと、行動するための意志が弱くなるばかりでなく、夢や目標をもとうとさえしなくなってしまうことが懸念されます。未来を力強く主体的に生きる…とは言い難い状況です。

別に、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所の共同研究の結果からは、「自分のよいところが何かを言うことができる」との問いに対して、学年を問わず肯定的に回答したグループの方が否定的に回答したグループよりも、「勉強が好き」と回答する傾向が強いことが明らかとなりました。注目すべきは、この傾向は「学業成績」にもよらないことです。学習は本来、「自ら学ぶ」と言われるように他律的なものではなく自律的なものです。自分自身を「価値ある存在」としてとらえることができなければ、学習に対する意欲も低下し、自ら学習に向かうことが難しくなると考えられます。

未来を生きる児童は限りない可能性に満ち溢れています。元郷小学校の児童には、自分のよいところや自分の特性を正しく認識し、自分の可能性を信じ、さらに大きく伸びるために、努力を続けてほしいと思います。そして、大切な自分の未来に対し希望を胸に大きな夢を描いてほしいと願っています。私たちの未来をも託す児童なのですから。

そのためには、学校にもできることがあるはずですが、児童自身が認識していないのであれば、まずはその児童のもつよさを見つけること。見つけた児童のよさや可能性を児童に認識させるとともに、さらに大きく伸ばすこと。そうした教師の働きかけこそが、児童の自尊感情を高めることに直結すると確信しています。

本校の目指す学校像「児童の自尊感情を高める学校(夢をはぐくみ、児童のよさや可能性を引き出し伸ばす元郷小)」の具現化に向け、力を尽くしてまいります。